中村俊定文庫
文庫 18
399

終焉記

宮城県図書館蔵
中村俊定文庫

その家としなすまゝ折から傳よ品かはり変
ることに此世を見るにつけ花かなし
角なしとは何ともの世無悲膳を公聞
をを伝え　紅涙を湯の瀬をとしてむ広はて
佛前経文の絶ぬ程　中にもなをわかき
人の行状を絶ことはりもと書すら御ある
作善の在りとまたんとするに抑先妣を
地のみ菩提の為に追善に香貞像

とこしへの為頼のしく人よ　父君ことよ是に臨
終ふよりてみなせ支部を必ず作りかきん
は頼りに家皆時をしゆるの家おわきりし
みを保世に迴向為く相從庵より入て右
はるよ如在の靈前を供養にいたしては
洞結兵しても性かはらぬ人とをして
四時乃これかをを供事旦暮に在
数を云出こと中　十有七年をしよくしてに

情厚く家より故わ厚く紙ひとえ重ね
多をつくりて一領ばかりふきつくるを
一衣をとめもつて厚く葬歌の回縁より
こまやかに心をつくし神を経
まして力をつくすものなんやのみて其後
此男生より仏を厚くまうすを
めしみて次第新墓参りの死骸をうめ
法華の志厚く四季折々の唱経して

即ち絵にて元来味をなすべし而后人よりふ
ゆくこと多く仏入の道殊にすぐれて
東の寺園千おんなをもはなさずと
打後ふ時をあらはすこと又辞せずして
折々の仏言にさいなるみ弥陀
多ありき志かしに去年いやしい者
はすより稼ぎて渋ずして情果
をむえ所ないとしきあるを見至る

おもむくほど出て家人のほとり寝の床
うちんすを願ひみし其夜より中
えりは法をきはりて病念いよいよ心
此をきこれ本志にかなふや鍋釜中の八日
夕はるさより急の事に臨み出て医王
参詣のてさても甲斐なく終に翌十九日
辰の刻はかなく行年五十八才にてもつの
客となりぬされハこの四ッはかり前の日々

一 句のはなし
業陰との蓋を敷かり雨の中
と耳に沁み何を作らん心すかりけるほどの席
其句勢を称して芭蕉翁の今と示されし
風流なりけると大いに果して世に辞世とも
一句なりともかかまや言ふても筆を絶ぬ
ほどしてなき跋を山谷宗林あまに送て
帰りとなし 其常庵をうけて深川も慶寺

みも埋もれて亡父の祥よ諸して
毎月墓の墳墓のかたへに一基の
石碑を建て弱冠の同宗の吊ひも
当骨を文市音浄宗を納む是を
亡母の墓と称乃ちかの碑を
建て無常迅速西方に義の
ちかひ深きまゝかくてなる
亡父亡母を思ふ時哀しく

哀悼を深ひ法を句一画に
のれる小帖をつくりて孝子の胸と
ま秋をのかりつゝ只手のはゝ
捨て一一連の西方をとりて
法へとゝやしく久中をしり
孤の身をとゝ孝子の夜雨

於哥舞徑寓居蚕窗燈下　湖十書

挽句　任至來

御茶湯のさゝやんてもさぶかる景　祇逕
いなかゝやはせ世平かりの飯屋斗　夏箕
あるゝ〜き佛乃形しほる面の影　柳尾
ゑと香もさつしの蓮の花の面　田社
罪と女や哥と御法乃聲よ沸　湖千
アゝ雲もを入るゝ定西方と　在轉
結ふて蓮もほほむや佛世界　水雖

やるせるや結きおはまの富の月　若水
ゆてたるふ屋やもち菱　露十
うふ圭よるゝぬ名ゝ〜ちなの家　春堂
風富師世のわるゝ
ふゝるまふを
いのゝ孔ゆゝ秋よ似ゝよ人の蛾ゝ蛾　江永
孤祭の風ゝ屋ふふゝと蓮の義　江松
使ゝ〜かいするゝ山ゝ自雨　江橘
ゆつゝよ苦をゝ三孔罪ゝ蓮ゝんゝ　江波

新てをんなの蓮の実　万里
雨後ゆうべの蓮　沈　万山
[illegible]
百舌の鳥の初めぬるや　鳥啼　四調
洲しををんなの蓮　入うつる白雨　斜十
蓮池の深紅　多色の糸　辞尼　志得
さうらんの洲しきるのをしの皐月　盛府
ゆうべ蓮てをるを　初をはくるを　雞　鳳十

白雨のはきの時の　如湘
猫の香のく　弱し　小袖う甫　貫四
けうとうをとる　猫の蓮の船　梅朔
[illegible]
富岬の初[illegible]
[illegible]　笹　粽　木髪
[illegible]　[illegible]　須　原富
[illegible]
[illegible]
[illegible]　蓮き　張伸　笛　信朔

物思へぬ人の身にも白雨　柏十

[illegible]

定まれる歌枕と落葉時　府月

こつぶ雨宗和名高き時　信梁

伸を足上てたゝに樗の葉　紫淵

蓮の葉に玉なして絶えらし　珠来

[illegible]

計めしの足つゝぬ湖や[illegible]紙と　戀阿

芭蕉玉まく　ゆよりて[illegible]の角　男十

きゆる　灯のけ[illegible]と蓮と白晴　作不知

[illegible]き西へ[illegible]く新きぬ　湖来

相撲や[illegible]る白花を清き　木童

[illegible]　小知

[illegible]　専里

山上[illegible]苔を[illegible]白花　水路

[illegible]の花[illegible]　琴風

[illegible]　湖堂

[illegible]富師母[illegible]

中へき[illegible]の[illegible]何さはぶ[illegible]　扇許

[illegible]富師の[illegible]

[illegible]　扇徐

生て[illegible]人と[illegible]　扇月

[illegible]　湖萍

[illegible]の[illegible]　柴十

法の[illegible]　惟章

[illegible]　三壽

[illegible]の[illegible]　奥川

[illegible]　沾遊

[illegible]　信礎

[illegible]　柏車

[illegible]　花十

[illegible]　東為

こゝろなき人の上着の出生　泰十

掛香とい玉の緒や名月　一鮫

通り町の茶屋のへりに月の角　湖町

拾所為こちら向河や三日月　湖石

豆あまえの茶屋の嵐や雨の夜　湖橋

さゝれ石や物のはりよきことより　備十

守前の寐咲ぬ玉内てる　男苍

菜の花も香月ませいの佛　祇貞

集名

皐影なく植ゑかきを
茄子と云ふ津色き
井手の紙衣情の
波にまけたなれしを
肩の小袖ぬれて滝し
去性子に對す

信鳥爺馬肝

あれや春と詠んけるの牛　潮十
雲とまがへて入相やたゝ老人　扇裡
苔の色のうつゝや禅の露　澣十
陣笠の塵と利うん枯花毋子　湖中
所富所入縁年を経て
ちらふ雨とのたれや苔　竹籟　露平
惜しへ仏のまを涼しくと　吉門
古城琴を聴入どきやうや即涅槃　菊狗

あるてふ生るる年と呼う角　稲磨
まぐらと粉みと河見合歓の碗　路十
所通や何うしやかと蓮の寺　倚墨
たとこまよ夏郎やうを　衣　其樹
ぬきし郎や年を焼して雲の夫　其潮
夕郎や坊ふ神をとう長寿　逸雅
花四とに法の初鳥やタ　涼　河朝
ふき人の四西とうふや餞の華　湖関

[illegible] 柏舟
[illegible] 釋乃木
[illegible] 雲柱
[illegible]
[illegible] 蘭十
[illegible] 沙鳥
[illegible] 信茂
[illegible] 渙十

[illegible] 風江
[illegible]
[illegible] 湖曉
[illegible] 湖上
[illegible] 梨芳
[illegible] 湖枕

人を行ふ法の師　馬十

源十郎の会堂をとむ

若行を師匠の内外のいとを竜　栄仲

苦い泉の道をはるし水牡丹　夜花

法の道を学ぶの白の弱　撫十

夏寒や多く善の法の花　文江

世を早自分の先の旅の留守　俊鳥

さみだれや静よ線の道　金亀

枯ふとも苦人や宮蓮の華　棠英

あるけくなる仏ふ白面　金露女

千を後左を特を
平生の中を毋の
ふるふを行ふ

入ふ寒あの形まて入取蝶　平砂

いあ見枯萎叶の実乃咲てう　温克

さらなよ分て分一や古　拙　由林

空えうとふ行ふ空の夏　買明

秋の雲と紅と吟へし叶郎　柳波

をみれハ蓮へ導ふれうか　銀波
しるしまる蓮の佛　翠扇
極楽へ通る蓮の枝折　梅旭
（風雲の極楽へ高てふけも卧房ときき
まくらをおしてゝ終よ紬の面袖の涙とゝ）
古尤の佛宵を咲ふさ清ふ雨　清泉
極楽の雲を出ふ旅路衣　三笑
帷子の雲ふ出ふ貫　十
心太の白の紬をぬ湖　湖蛭

行ゆきし世や源の春　玉馬

和員

（竹と黄之の姫ゆ竹と
黄ゆと世を之ゆ八月ハ
紅しみゆ八月ハ
清水　櫻の幸と花咲）

雲ヤ竹も毋ハ　かつら衣　杉雨
極楽と花や降人之月ハ　うこん
数る時と合堂房　柏丸　稲十
紅の毒生ゝさる　湖　木子

加補女像賛

婦人加袂始(ハジテ)鞆波翠(ト)獨庵所(ヨリ)
名(ヅル)也後更(カウヤメニ)旦(フ)千色(ト)巽窗之妻
風窓之母也
[illegible]
文房業を[illegible]
の[illegible]を[illegible]
[illegible]の[illegible]

されとも亭子の流をとゝしめて
弟子去りて猶暫く営ハこそ家を
おさめ給ふ前とはるかなりしきれと
今鳥翁を離れ家を弟子三太
麻平並てよく守り頼ミ是皆物を
善婦の篠をあらはしけりに人あまて
かね婦々の縁と称す婦人にもてなえて
茶へすかくんちへの誹人ならぬを学

母なしとはいへともとこよしかなき世にありし君
嫗やいふ甚くことなれ婦女の雲をき
見ゆるまゝ毎笑劇相続して
狂へ至るまゝに詞林の一本なれハ
此家の極ひ賞皆をつらむや

西岸平砂

弟子の手ちりて佛のゆめの册　湖丈

光陰や見ん経の蓮のきはみなし　露井

白蓮や萩野と成る手向かな　湖平

ほろりと洞や落て蓮の玉　宗孚

蓮の葉や五月雨又に敷　行翔

降る雨日もし昊の袖知らぬ月雨　鷺十

かきちてと嬉し塔や法の場　仙友

皐月空紙も洞は外の雨　菊十

西へ行け果もなき蓮の台一つ手　烏巣

かくれ家の妹とし経の一字抄　存義

寂寞の個……老婦人の……

蛍ともちりて落しやる八時　圖大

帷子の行水や七ツ袖ぬるみ　道院

ほろほろと帰る苔や朽出の山　葵足

此葉の雨露の淀と語ゆくこの花　湖風

稲の穂へ一と走し道や蓮の風　湖稲

うきよ敷ふねよ八こゝ　やはれ千そ　湖舟

[illegible]

見生山至

沈香の[illegible]て　時やゝ月　雨生阿

橋のうへの[illegible]　ゆうな　湖明

[illegible]　雲潮

[illegible]　茱陽

[illegible]　十麿

[illegible]

千色庄色かりて[illegible]
少者の[illegible]追福のたゝめ

紅とさうたに蓮の蒼の　社鼠

極楽とかしたまとすゝ蓮蓋　馬肝

[illegible]の[illegible]山[illegible]の
[illegible]遠境の門中
老まて情[illegible]の罪を

ゆるさ[illegible]

恵稲葊

五月廿一日の朝遺骨を納ム

拾ひ取る仏ゝ千ゝ代つゝ消の角　湖十

遺骨を納ム日中俳諧まんまんて

木ゝ仏の箸をゝるゝや苔の苔　戀阿

皐月ふるれ納や空はゝ　信朔

初七日　五月廿五日

祖父の辞世を元字ゝ石に刻て
亡母の法号を弟ゝ石面ゝ刻ム

五月やゝ石ゝ仏ゝ苔ゝ　湖十

[illegible]ゝ拾ひ取る家鳩ゝ　江永

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ　信朔

二七日　六月三日

[illegible]

哥仙

毎の色を背景小茅舎家源し　湖十
春行布く朝の敷入多　柳尾
桂隠の人数元しの使作さみて　珠來
紅葉を見るは先もはし　吉門
樹々秋之ケ月陰に暮行く　道院
扇　志　鞠　笠　春　上田社

はつ〳〵と砌の高砌稲ふへて　在轉
帚　祝　拙と洒落くさん家　匂狗
休屋所中ふ春に一文字　祇貞
信ふ病ひの物ふ春　二瓣　小知
廿春ふ山春ふ春ふ思ひすし　春堂
拙ふ人しいと陣外の泥沈　湖十
世の丹の宇佐ふ御詫よ明て　匂狗
洞ふきそひ春霧の船新　珠來

[illegible]も中今年　酒　柳尾
寒て　根ぬ　[illegible]　眼ゑ出し　道院
[illegible]て花の[illegible]山　田社
紙[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　在轉
名
いき[illegible]雪と消ゆ[illegible]　吉門
門[illegible]　[illegible]　[illegible]　祇貞
[illegible]の船[illegible]　[illegible]　小知
今一[illegible]島　[illegible]　春堂

死[illegible]　[illegible]　[illegible]　珠來
社人を扶[illegible]　前　僧正　田社
今[illegible]又[illegible]　[illegible]　湖十
ひて[illegible]　[illegible]　[illegible]　柳尾
大[illegible]へ飯[illegible]　[illegible]　道院
日掛[illegible]　[illegible]　駑狗
や[illegible]身を[illegible]　[illegible]　春堂
[illegible]　[illegible]　小知

温泉手帖をかう屋五人　祇貞
かるくひらけける日蓮の芽　珠來
矣滴乃琴弾ちらす夏の田社
新乃稚を芽を出よろう　春堂
蓼明帝菜を絶ぶ家ち孫　吉門
雷雨乃絡も弼陽の一天　蚓筆

滿座焼香禮而退席

三七日　六月十日

三七乃名手乃ものの数ふ　湖十
会窓乃蛍小光しく笠をつてきて
青かりし世や光陰の白簾　馬肝

四七日　六月十七日

雨ふいとふ明り如の数
うをあれる絡千住夏
れとあかるして猪弁
いはしうたにうぼれ湖

蟹よ助の家にはられて山岳の
蒼前よりはくまりぬ

押ふやうなる波の音 湖十
敷とすこし 赤い家の 雪 木髪
歩んでゐる乃若うなを黄ばれて 潮十
一すはうこんゆう 八幡祭 如湘
四つも屋かもし屋ふの月 万里
道ちくよ 稲穂のたくぼー 戀阿

稲の田のやうな夕ぬ孫の恋 若水
為乃ホ絵を深い市思案 柏十
勤労の為千歳を繋よ本 湖関
雪を笑ふて旅さちれる 玉馬
多動のいよくやる北風千 馬十
男 紅葉とさ恋ひを寄 至連
多三百 伽羅費して結蒼の 信麓
おさまり踊 大般若 経木子

酒の家入鶏とゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ　湖虹
月ゝのゝ人の人かゝゆゝ　万山
華表千歳鶴ゝ[illegible]の山を越　湖丈
春の拝殿のなよゝゝ　俊鳥
庵寮入怪井沢ゝ乳母亀て　男十
玄関ゝゝゝ様の道行　期十
屋根芽ゝ[illegible]やゝきへゝ流ゝと　曇潮
さむるや夏の酒ゝ碓ゝ　湖稱

杖香入吳見ゝをとゝあて[illegible]る　杉雨
始るまゝいやゝて菜漬かゝゝき　茶十
情奥へ新米坊主張ゝ入も　紫淵
紫山ゝを霜ゝゝや捨ゝ人　惟章
うちくゝとゝ敲かゝ孫ゝ下紅葉　信梁
氏子ゝ角力ゝゝゝの神俺　澳十
三月ゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ　風江
右直袋の山をゝゝゝ一蜓

半合の後より雛のとれて　湖堂
あらけなくふる六月の雨　柴十
白鷺の名入浴かきさらし　湖橘
勝費捨て高たてこ吾繍師　湖石
香よりきき蕊の宮の迦陵賓　澣十
彼岸のうちの蓬を捜ひ馬肝

各捻香

初月忌

知らず来し影ヤ月の傘　湖十
所時ふるとの常世花　木髪

五七日　六月廿四日
七夕の忌り年
まうりふる

法の舟のちりやひろい蓮花　湖十
多仏ちや丈時さきうきうん子　茶十
為ひけり撞法原ーや青ひし　文十

六七日　七月朔日

改て物思ふ身や今朝の秋　湖十

七七日　七月八日

廟祭

花よ涙て夢ていふ西瓜を切　戀阿

ほろ〳〵と墓場の蟬の尾　信朔

志ゑみ消〳〵ろよ秋の鐘　俊鳥

哥仙

露白き隈の數きけ多ち　湖十

佛と告の黄金考　秋蘭十

吾川ろ月新ろ桶捲て　扇裡

押掛　客千　電ろさん　琴風

待浮ろ机を空て初ける　湖曉

杭を拭千ろ方の侍ろ　信朔

うゑと何の追ふ笑ひ行　鷺十
姉よりて宿かりる　鶴　湖扶
かくもきゝ髪と弟一父母の悲　菜陽
多汲かへて墓原を雨ふ　湖町
杉蓋と組へてさゝれぬ鍬の空　花十
むしりとひく頃戸の山風　金露
多の月園の人〻和きて　府月
秋雨や新よ社業ふる人　湖平

戸の蘆ふるとと蘆のち羽織　鳥十
花枯〻路〻と守る俳の巣　柳波
涅槃会を笑ふ蘆むる日之ゆ　扇徐
ぬる〻宮〻の法ときき〻ま　木童
物と畫山家の陰乃京生き　扇許
ちやうて駕千下ゝる門迫留　泊旋
辨慶の太刀に牡丹を向垂　稲麿
たう〻やき朔日の弔　三笑

一本を門とする錆入廷　扇月
六十六部　逗留　雪　菊十
見事のこの鉄瓶の烏帽子　金亀
ゆいて入船の棹を突く　露井
駆付て出る浦船舟投て　信茂
痩るこの湖　蛭女なくを　柏舟
吹ちきる雲の世日の朝の月　水雞
敲くひれ　踊かなひく　沙鳥

蕪赤よと入えぬ伊勢の玉祭　原富
鋤古墓をかくけの屑　其潮
同塵を祓ふ鉢さしたを開て　貫四
縄をして作る　一日の茶屋　宗孚
花の山乃ぎまを鉄の人　江永
鈴ふや　鏡の紐の糸　挺　社嵐

作禮而去

おきな玉の来まゐ駕のうへ
行くさ後年より迫き修修ひ系
野津雪毋の雪ふる〻年〻ふるき

[illegible]の[illegible]なし　魂系　湖十

合啓者世を辞して此年や十と
いひしとき駕のいふ言とを感ず
感よ白駒すみやかなるよりて唯系
よ似ずよ系蓋よ似り似ず

祖父ゟ一代修行よ似ず亡父ゟ徳
よ比ずよ似ずの修善仏法の功
ゟ面をそそ家家の仏達ゟ性
ゟ名元をを世世ゟ法ゟと
拵事眼を匂
人めゟ雪の僧のるゝ十三年　湖十
選窗翁追福
羽箒よそ[illegible]物の世ゟ小平砂

しるしすや月日たちぬる法の華　道院
佛の発すとい、法、三業芥　栢莚
梅の富貴の家の窓の一むら　買明
春と生ほひ人義の家　柳尾
臥芝よ和歌や道の佛の発　水宿
梅折て世うをにたふる家　帷章
内裏なる十三年や昔の春　永機
土壇よ寺ふる法の梅咲枝　陀言

梅の香や今年よりたる若者待　放牛
春ふかみ小さき人の天蓋　馬肝
発願菩提心　佛前未奥を鳴天ナムヲミタイ〻〻〻〻
梅の香を以て二十万信ち玉　珠來

寶暦八戊寅歳正月

家父発願世を富て生の
喪よりはるを待ち終ぬ月

ちりけしとしナ七四の春ゝ千
いなかの角ゝ四ゝしの火とな
あふてんなよ老を笑へ志の
ちりゝ三尺ゝ神や佛を
又通しと俗語よやゝ
ハゝたるを怪よせんよりと
春ゐのふるてゝ拾ふ拾ふ湖十
梅の毒先咲うゝや菊世佛　珠來

梅折し仏壇へ手向ふ　帷章

寶暦十二壬午歳正月

六十三周及十七四の追悼の
吟一連記生の法語よ写して
宴午拾ふてゝ而ゝ四ゝ琴宮を
吊ゝ多数　敬生　桐延を
年ゝハ新年入行れて

おきなの家ゝ芝ゆゝ[illegible]の家　湖十

家々[illegible]機ゝ[illegible]常をありれむ

青柳や逝[illegible]との[illegible]ゝ[illegible]　湖十

風雲の毎の[illegible]

[illegible]

[illegible]の数ゝ[illegible]

あまもあこゝの集なる

程ゝ[illegible]

何ゝ[illegible]

なつ原こまき
長崎のおまむきなるべし

墨龍

堀貞魚人撰集

寛暦十二年壬午仲秋

大日本橋南大路　鑿師　嵩魚川木童